慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇一八年度ベイティン遺跡 (パレスチナ自治区) における考古学的発掘調査
Sub Title	The 2018 archaeological excavations at Beitin, Palestine : preliminary report
Author	杉本, 智俊(Sugimoto, David. Tomotoshi) 菊池, 実(Kikuchi, Minoru) 渡部, 展也(Watanabe, Nobuya) 稲野, 裕介(Inano, Yūsuke) 間舎, 裕生(Kansha, Hiroo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2019
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.88, No.2 (2019. 4) ,p.53(217)- 78(242)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20190400-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇一八年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査

杉本智俊、菊池　実、渡部展也、
稲野裕介、間舎裕生

Ⅰ　序論

慶應義塾大学西アジア考古学調査団（団長　杉本智俊）は、二〇一八年八月八日（水）から二一日（月）までパレスチナ自治区ベイティン村のブルジュ・ベイティン遺跡及びワディ・タワヒーン地区において発掘調査を行った[1]。本調査団は二〇一二年度から二〇一六年度に日本学術振興会科学研究費[2]の支援を受けて同村において発掘調査を行い、二〇一七年度も追加調査を行ったが、依然として重要な不明点が存在したため、本年度も小規模な調査を行うこととした[3]。

主たる調査課題は、これまでに露出しているビザンツ期の教会堂が何を記念したものかをあきらかにすることであった（図1）。本教会堂は長さ40m、幅27mにわたる大規模なもので、その中央には何かを記念する構造だと思われる中央遺構が確認されていたが、その内部からは何も検出されず、目的も不明であった。紀元四世紀の伝承（ボルドーの巡礼、巡礼エゲリア及びヒエロニムス）[4]によると、ベイティン村と同定されるベテルの端には、「ヤコブの寝た石」（創世記 28:10-22）と金の子牛を非難し殺された「預言者の墓」（Ⅰ列王記 13:26-32; Ⅱ列王記 23:15-20）を記念する教会堂があったとされる。しかし、この教会堂に関しては、本遺跡の他にさらに東一キロほどに位置するヒルベト・マカーティルだとする説も存在しており、その同定は確定されていなかった[5]。また、本調査隊の成果においてもこの教会堂を「ヤコブの寝た

図1　ビザンツ期教会堂のアプスと中央遺構（北西方向から撮影）

石」や「預言者の墓」と結びつける直接的な証拠に欠けていた。

そのため本年度は、記念物や墓が設けられていた可能性が高い以下の地点の調査を行った。①中央遺構のプラスター床下の調査、②中央遺構東側部分の調査、③ブルジュ・ベイティン遺跡南側の墓の調査、である。また本調査期間には、④ワディ・タワヒーン地区の大型貯水池に付属する施設の発掘調査も併せて行った。この建物は貯水池に接して造られており、アクアダクトが谷側に向けて造られているので、何らかの水利施設であると考えられてきた。しかし、その正確な目的は不明であり、この点はワディ・タワヒーン地区における十字軍期[6]～マムルーク朝期の農業集落の構造を知る上で重要だと考えられた。この調査は、それを確認するための調査である。

本年度の調査参加者は、杉本の他、菊池実（東京基督教大学）、渡部展也（中部大学）、稲野裕介（元北上市教育委員会）、間舎裕生（東京文化財研究所）、鳥越道臣（国際文化財株式会社）、有吉亮（慶應義塾大学研究生）、長尾琢磨（慶應義塾大学大学院生、部分参加）、藤田隆太郎、松本健佑、逢坂暖（以上三名、慶應義塾大学学部生）であった。パレスチナ観光遺跡省からは、スフィヤ

ン・ダイスが参加した。ワディ・タワヒーン地区の調査は、基本的に間舎、渡部、藤田が行い、ブルジュ・ベイティン遺跡の調査はそれ以外の人員が担当した。③の墓の調査には、両方のスタッフが参加した。鳥越は主として遺物の記録を担当したが、遺構の実測、記録作業にも加わった。本報告は、各地区スーパーヴァイザーによる報告（Ⅱ、Ⅲ節は稲野、Ⅳ、Ⅴ節は間舎）に、杉本が加筆修正したものである。

Ⅱ　中央遺構の調査

これまで中央遺構ではプラスターの張られた床が確認されていたのみで、それ以外の遺構は出土しなかったので、プラスターをはがしてその下の状態を調査することとした。まず、南側の翼廊（当初アプスやミフラブと呼んでいた突出部）に墓がある可能性を想定し、中央遺構の南半分の埋め戻し土を除去し、その確認を行った。しかし、そこに墓は確認できず、大きな亀裂の入った岩盤が出土した。そこで、中央遺構全体の埋め戻し土を除去し、プラスターをはがしてその下の状況を確認した。すると、中央遺構全体の床から特殊な「石」が出土した。

南側翼廊　調査開始前の観察では、中央遺構は床全体がプラスターで覆われている（L865）にもかかわらず、南側の突出部ではプラスターが矩形に抜けているように見えた（図2）。そのため、この部分に地下墓へ続く開口部がある可能性を想定し、埋め戻し土を除去した上で発掘を計画した[7]。まずプラスターのない空間の際から際まで、南端の突出部の中心を通る長さ160cm、幅60cmの南北のトレンチを設定して発掘作業を行い、その後突出部全体を露出した。ただし、突出部の南端部は30～40cmほどの幅で平石が四点岩盤の上に敷かれており（レベル：約878・12m）、突出部の円弧部分の基礎となっていたので、それはそのまま維持した。

結果的に、トレンチの下は赤茶色の土と石灰岩の岩盤（レベル：約878・02m、周囲のプラスター面：約878・17m）となっており、当初想定された墓穴等の遺構は認められなかった（図3a）。赤茶色の土は、本遺跡の他の箇所でも岩盤直上で認められるもので岩盤が風化したものだと思われる。岩盤には十字状の亀裂が認められ、南北方向の亀裂は突出部のほぼ中央に位置し、軸とも方向があっていた。東西方向の亀裂は、中央遺構の入口部分の切石の連続上に位置しており、そこから翼廊奥の平石面までの幅となっていた。南西部分は、周囲三方に比べ

図２　調査前の中央遺構（北側から撮影）

て20㎝ほど垂直に落ちていた（底のレベル：約87・81ｍ）。これらの亀裂は自然作用によるものと思われるが、正方形に垂直に落ちる形状は立石など何かを装填する基礎のようにも見える。この推測を支持する直接的な証拠は存在しないが、この亀裂の位置と建物の関係、後述する丸く赤い痕跡は、この場所が何らかの特別な意味を持っていた可能性を示している。

翼廊入口手前東側の石の上からは、赤い二重同心円状の痕跡が認められた（直径：約22㎝、図３ｂ）。これは、真鍮などの金属製の儀式用の台の錆が石の付着したもののように思われる。もしそうだとすると、この翼廊部分に何らかの崇敬の対象となるものが存在していた可能性が考えられる。ただ、上述のように、この点はあくまで推測の域を出ない。

プラスター床　翼廊部分の調査で墓などの遺構が検出されなかったため、その後中央遺構全体のプラスター面をはがしてその下の状態を確認することとした。その際、もっともプラスターの残りのよい西側部分の幅約60㎝を帯状に残し、翼廊南西の角のプラスターは入口から約90㎝幅で翼廊のトレンチまで保存した。プラスターは、それを除去する前から三層あることがわかっていた。それぞれの層から炭化物を採取し、年代を測定

図 3a　南側翼廊から出土した岩盤と亀裂（南側から撮影）

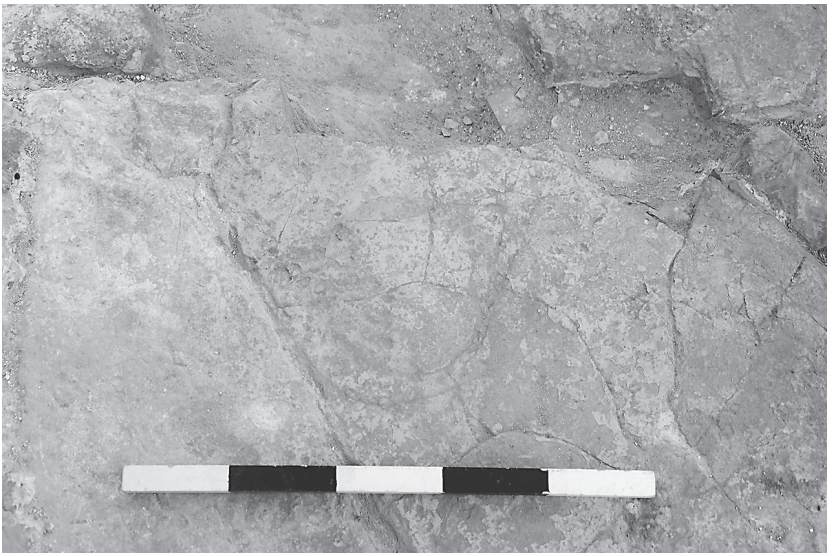

図 3b　南側翼廊入口東側で検出された赤色同心円状の痕跡（北側から撮影）

したところ、それらはすべて十二世紀末から十三世紀始めに年代づけられた[8]。すなわち、これら三層のプラスターはすべて十字軍期の末期に短期間に塗布されたことが考えられる。尚、三層のプラスターは、ローカスとしては一つ（L856）にまとめている。

不定形に割れた石　中央遺構のプラスター床の下からは、不規則に割れた石が隙間なく組み合わされた状態で検出された（図4a）。その様相は、大型矩形の板石が規則的に並べられている教会堂内陣とは異なっていた。これらの石には黒く光沢のあるものが多いが、そうでないものも混じっており、中央部分が周囲に比べて12㎝ほど高くなっていた。また、これらの集積された石全体に、一辺約2・3mの正方形の切り込みが施されていた。

割れた石（図4b）には大きく平らな石も数点残っており、特に四角い切り込みの南側、西側、北東角のものがそうである。これらの石にもヒビがはいっているが、それらはすべて不定形で、矩形になっていない[9]。また、これらの石は全体が丸く黒光りしている。一方、中央東側、南西角付近の石は比較的細かく割れたものが多く、さまざまな形状となっていた。色も黒光りしていないものが認められる。とりわけ南西角には、赤っぽくよく磨かれた石で魚とラウンデル模様が彫刻されたものが二点はめ込まれていた。これらはビザンツ期の教会堂のチャンセル・スクリーンの石のように見え、実際この地区からは同じ素材のチャンセル・スクリーンの石が覆土から出土している。このことは、ビザンツ期の建材の石が、後に床の割れ目の欠損箇所の充填材として用いられたことを示している。また、南側と西側の大きな石の間に詰められた小さめの石の素材は、大きく黒光りする石と同様だが、細かく割れている。

正方形の切り込みの外周にも、二種類の石が用いられていた。東側、南側、西側には、小型の板石（幅80㎝程度）[10]が敷かれており、南西角では石が損失して土となっていた。一方、北西および北側の石は、表面が滑らかなひとつの大きな石のように見え、黒光りしている（ただし、北辺西よりに細い断裂が存在する）。特に北西角の石と切り込み内側の西側の石とは同一素材に見え、外周北側の石と内側北東角の石も同一のものに見える。さらに、西側外周の石が飛んで土になった部分のさらに西の石も同一の滑らかなものに見える。切り込みの北西角は直角になっておらず、あたかもこの石を大きく残すため、そのようにしたように見える。

図 4a　中央遺構で確認された不定形に破損された石（東側から撮影）

図 4b　魚とラウンデルの彫刻された石（西側から撮影）

正方形の切り込みは、南東角部分でも正確に直交しておらず、全体に中央遺構の中央から北側に寄っている。仮に南側の翼廊に特殊な遺構があったとしても、このように雑な設計を当初教会堂が建造されたビザンツ期に行ったとは考えにくい。また、後に充填されたと思われる石も、これの切り込みに合わせて組み込まれている。おそらくこの切り込み自体は、後代にビザンツ期の石と教会堂を再建しようとした時に施されたものであろう。

これらの事象を総合すると、以下のようなプロセスが考えられる。

（1）ビザンツ期の教会堂建造時には、中央遺構の内側に表面が滑らかで、黒光りする大きな石が存在した。

（2）この石は、おそらく教会堂の廃絶時に細かく砕かれた。

（3）十字軍期の始めに小型の教会堂が再建された時、破壊された石の修復が試みられたが、残った空隙にはチャンセル・スクリーンの石など別の石が充填された。

（4）この石は、十字軍期の前半は露出していたが、十二世紀の終わり頃、三重のプラスター床で覆われた。

もしこのような再構成が正しいとすると、この石はあきらかに特別な崇敬の対象として中央遺構の中に含められていたこととなる。ビザンツ期の教会堂の中央に特殊な遺構を建造してこの石を含めていたことを考えると、まさにこの石の存在そのものが教会堂の建造理由であったと思われる。紀元四世紀の巡礼たちの伝承と合わせて考えると、当時の人々がこれを「ヤコブの寝た石」と考えた可能性は非常に高いであろう。この石の重要性は、一度破壊された石が十字軍期に修復され、新しい教会堂が建てられたことによっても示される。十字軍期の終わりに施されたプラスターが、予測された破壊からそれを保存するためのものであったとすると、そのこともこの解釈を支持するものとなる。

刻印　切り込み内部西側中央の大きな石には、図像が刻線で描かれたもの（グラフィティ）が三つ検出された（図5）。この石の中央東端、すなわち、中央遺構のほぼ中央には四角い図像が描かれ、その内側四隅は丸くされていた。また上辺と下辺には翼廊のような馬蹄形図像がつけられていた。これは、おそらく中央遺構自体の図像だと思われる。中央遺構は、十字軍期になるとその東側

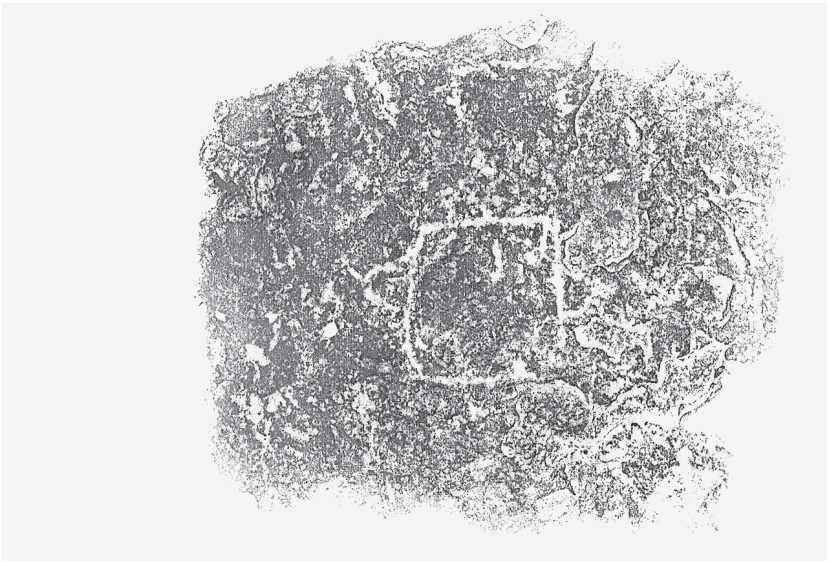

図５　破損された石に施された刻印（拓本作成：鳥越道臣）

に矩形の部屋が増築され、形状が変化するので、この図像はビザンツ期の様相を描いていることになる。すなわち、このグラフィティ自体が刻まれたのもビザンツ期であろう。さらに、この図像の南西側には星のような図像、南東部分にも特定できない図像が二等辺三角形をなすように位置していた。これらの図像自体が、中央遺構とその中の石が特別視されていたことを示しているであろう。

Ⅲ　中央遺構東側部分の調査

本年度の調査では、中央遺構東側部分の状況も確認した。ここは教会堂のアプス正面にあたり、礼拝の焦点となる場所であるにもかかわらず未調査であったからである。特にビザンツ期の床では、このすぐ北側部分から特殊な鍵穴形遺構が出土しており、その横になんらかの記念物が存在したとしてもおかしくなかった。また、十字軍期に中央遺構に接続して造られた矩形の部屋の北側の壁が出土しており、この部分に部屋の東壁があるはずだと考えられた。すなわち、十字軍期の独立した教会堂の全体構造と東側の建物群との関係がわかると期待された。調査は、昨年度検出の東西壁（W824）の石列を基準に約230×340cmの調査区を設定して行った。表土（L845）を除

去すると、南北方向の壁（W826）の連続と考えられる石列が現れた。その西側にはプラスターがついており、十字軍期に中央遺構に接続された矩形の部屋の東壁を構成するものと考えられた[11]。W826の東側には、三方を石壁で囲まれた矩形の部屋が接していたので、それとビザンツ期教会堂の床および十字軍期矩形の部屋との関係を念頭に調査を行った。

南北方向の壁W826　アプス前の敷石の上に、幅1m、高さ1m程度、長さ4・2mにわたり、二段の石積みが残っていた（図6a左端）。これは、北と南にさらに続くと思われる。このうち北側は崩落土の山に埋もれているが、壁の連続と考えられる石の一部分が露出しており、少なくとも高さ1・8m、四段以上の石積みであったことが考えられる。東面の観察では、敷石の上に60cm大の石を積んでおり、青灰色のモルタルで固めていたが、西面はプラスター壁で隠れていた。この壁が十字軍期の建造であることは、石の大きさが不揃いであり、小さな平石をはさむ粗く切った四角い石でできていることからも支持される。壁上面の南側部分には、上部に積まれていたと考えられるプラスターが付着した40cm大の石の連続が崩落した状態で認められた。上部の崩落した瓦礫層から採取された炭化物は十四世紀の年代[12]を示しており、この建物が最終的に破壊された時期を示していると考えられる。

W826東側の空間　W826の東側は、アプスの前面にあたる。W826から崩落した土石（L857）を除去したところ、他の内陣部分と同様、厚い板石が全面に敷かれていることが確認された。しかし、特殊な遺構は認められなかった。

調査区の南側部分では、W826に接して東西に走るL851、その東端から南北に走るW852、その南端から東西に走るW853によって東西140cm、南北60cmほどの空間が囲まれていた。遺跡全体の位置からすると、この空間は入口から教会堂を経てアプスに至る中心軸に載っている。これらの壁は、みなビザンツ期教会堂の板石の床に直接載っていた。内部には、周囲の石列に沿うように30cm程の大きさの石が落ち込んでおり、これらをL855とした。石の間からは十字軍期～マムルーク朝期のHMGPW（Hand Made Geometric Painted Ware）土器が出土した。これらの落石を取り上げると、部屋の床からもビザンツ期教会堂の板石が確認された。この小部屋は、十字軍期に中央遺構に付加された矩形の部屋の東壁に接するように造

られていたが、入口は確認されておらず、遺物もほとんどないので、どのように用いられた部屋か不明である。

W826の西側　W826は、上述の通り、過年度調査で確認された矩形の部屋の東壁の延長であることが確認された。調査は、東側の幅約1mを最初に掘り、後に西側と南側に拡張したが、南壁には到達していない。塔に近づきすぎると、崩壊の危険があると考えたためである。

瓦礫層　床面に近い覆土からは、建材と考えられる石が密に散乱した状態で出土した（図6a中央）。表土直下から床まで約75cmの厚さで堆積しており、破壊層（L858）と仮称した。写真記録の後、これを除去した。

プラスター床　調査区の北半分の床面にはプラスターが塗られていたが、南半分ではこれが確認できず、板石の床が露出していた。

不整形の穴　調査区東南の床面に1m×0・8mの不整形の穴があり、長さ1・5m、直径45cmの円柱が突き刺さった状態で出土した（図6b）。穴の周囲には板石が確認されたが、中央部には存在しなかった。床面より下からは、本遺跡岩盤直上に見られる赤茶色のぼろぼろの土が認められた。破壊された穴の側面を観察したところ、東側はプラスター床の下に板石が並んでいたが、北側は石を確認することができなかった。床の敷石は円柱によって壊された可能性もあるが、円柱が突き刺さった時にすでにプラスター下の板石は壊されて存在していなかった可能性も考えられる。実際、この部分から破損された板石は確認されず、後述するように、この北側部分でもプラスター下の敷石は存在していなかった。もし分厚い床石があったとすると、円柱がこのように深く突き刺さるとは考えにくく、この場所も十字軍期には敷石がない土の上に直にプラスターが張られていた可能性が高い。

プラスター床の破壊部　このような穴の状況に鑑み、北壁から長さ1・5m、東壁に沿って幅1mの試掘溝を設け、床のプラスターをはがしてその下の状況を確認した（図6c）。北東隅では床の板石が割れ、中央部分が下に押し込まれ、石が欠損した状態であることが判明した。壊れた石敷きの床は修理されず、そのまま直接プラスターを塗って新しい床を張るという非常に雑な作業が行われていたことがわかった。プラスター床には二層あり、上層は比較的柔らかく、炭化物など夾雑物を含むのに対し、下層は堅く緻密で、より白く見えた。採取した炭化物のサンプルは、十一世紀後半から十二世紀前半の

図 6a　中央遺構に付属する矩形の部屋の破壊層（北西側から撮影）

図 6b　中央遺構に付属する矩形の部屋の床と穴（北西側から撮影）

図 6c　中央遺構に付属する矩形の部屋のトレンチ（南西側から撮影）

年代を示している。[13]

以上のことから、この部分に関して、次の三段階を考えることができる。

1　部屋の北東隅の床の板石が、上方からの衝撃により破損し、破片は波打ったような状態となる。

2　1の床の板石を修復せずに、プラスターを塗り、床面を平坦に整えた。

3　何らかの理由により、建物が大きく壊れ、円柱が床の穴に突き刺さった。

このうち2の作業は、炭素年代によって十一世紀後半から十二世紀前半、すなわち十字軍期前半の矩形の部屋が造られたのとほぼ同時に行われたものだと考えられる。このように雑な作業は、この建物の外壁が雑多な建材を組み合わせて作られている様子と合致している。1の教会堂の床が破壊されたのは、おそらくビザンツ教会の廃絶時であろう。破壊作業はかなり激しく、教会堂のアプス前面やモザイク床の破損状況とも合っている。3の再建された十字軍期の建物が最終的に破壊されたのは、東壁W826上部の崩壊した石から採取された炭化物の年代から十四世紀頃だったと考えられる。

Ⅳ　ブルジュ・ベイティン遺跡南側の墓の調査

地元住民の情報から、ブルジュ・ベイティン遺跡の塔の南辺から直線距離で約60ｍに位置する空き地に墓が存在し、近年まで露出していたことが知らされた。この墓の開口部が空き地の立ち上がり面にあったとすると、まさに教会堂と向き合う位置なので、この墓と教会には密接な関係があると思われた。特に中央遺構の調査で発見された「石」が実際にヤコブの寝た石を記念したものであったとすると、近くに預言者の墓も存在したはずだと考えられ、これがそれである可能性を検証するため、緊急に発掘することとした。

作業手順は、まず重機を用いて土砂や廃棄物を除去して墓周辺の岩盤を露出させたのち、内部の清掃および記録作業を行った。なお、当該墓の上には現代の道路が敷設されているだけでなく、天井部分の岩盤は風化が進んでおり崩落する危険性があったため、作業後は再び土砂によって埋め戻した[14]。

墓は、地表が2ｍ程度隆起した箇所に位置していた。南北に隣接する二基の墓が、岩盤の崩落によって連結したものだと考えられる。以下では、北側のものを墓Ａ、南側のものを墓Ｂとして、それぞれについて記載する。また、これらの墓は、長年人が出入り可能な状態で放置されていたので、原位置を留めた副葬品や埋葬骨などはあまり残っていないと調査前から考えられた。

（1）墓Ａ

入口部分　墓Ａ（図7ａ）は、岩盤の風化などによって天井部を含めた北側部分が崩落しており、入り口部分の位置や形状は残念ながらわからない。後述する墓Ｂは、天井から階段で下りる形式の墓であるが、墓Ａは岩盤が南から北へ傾斜する場所に位置しており、それを利用した横穴墓であった可能性が高い。実際、当該墓の南西に広がるワディ・タワヒーンの墓のほとんどは、谷の斜面を利用した横穴墓であり、竪穴墓はまれである。このため、北側の崩落部分は「前庭部」と仮定してローカスを設定してある（レベル：878.72ｍ、L1008）。残存部分から推定される天井レベルは、約879.47ｍである。

ピット　墓Ａの内部には、この「前庭部」から110㎝ほど岩盤が掘り込まれたピットが設けられている。床（L1006）は東西180㎝、南北200㎝の矩形で、床面はほぼ平坦に加工されていた。レベルは877.60ｍとなる。

図 7a　墓 A 全体図（東側から撮影）

アルコソリア　床の東辺、南辺、西辺にはそれぞれ遺体を安置するための小部屋が一つずつ設けられている。中央の床部分とこれらの小部屋との仕切りの部分は上部がアーチ状を呈し、ビザンツ時代に特有のアルコソリウム（arcosolium、複数形 arcosolia）の特徴を示している。ピットと各アルコソリウムの間には幅約30㎝の立ち上がった壁があり、壁の上面から約45～50㎝ほど（レベル：877・73ｍ）まで掘り下げられている。

アルコソリウム1　東側の小部屋（部屋1、L1001）は南北に長い矩形で、長辺200㎝、短辺70㎝を測る。天井および南東部分の壁には亀裂が入り、崩落の危険性があったために、完全に土砂を除去することができなかった。内部からは、人骨片やビザンツ期の土器片などが採集された。

アルコソリウム2　南側の小部屋（部屋2、L1002）は東西に長く、長辺170㎝、短辺80㎝である。南東部の壁には直径80㎝ほどの穴が開いており、墓Bとつながっている。ただしこの穴は人為的に設けられたものというよりは、墓が隣接して壁が薄くなった部分が崩落したものという印象を受ける。内部か

らは、若干の人骨片や土器片が採集された。

アルコソリウム3　西側の小部屋（部屋3、L1003）は部屋1と正対するように設けられており、墓Aの中では最も壁面の状態が良好である。寸法は長辺170cm、短辺80cmである。内部からは、人骨片やビザンツ期の土器片などが採集された。また、壁の南西部には小さな穴が開いており、その奥にも埋葬室（L1010）があるようで、若干の人骨や土器片が検出された。この穴の直径は20cmにも満たないものであり、奥の埋葬室への本来の出入り口でないことは明らかである。したがって、墓Aの南西部にも同様の墓が隣接しているかもしれず、その場合、ブルジュ・ベイティン遺跡の南部にもある程度の規模の墓域が広がっていた可能性がある。

（2）墓B

墓B（図7b）については、墓Aとの間に開いた穴を出入り口として土砂を搬出し、清掃を行った。その結果、床（L1007）の北辺、東辺、南辺にアルコソリウム型の墓室を持っていることが明らかとなった。北側の部屋（部屋6、L1012）の北西部と墓Aの部屋2との間に穴が開いていることからも、墓Bの方が若干東側に位置していることがわかる。全体的に墓Aに比べて小ぶりであり、ピットとアルコソリアの間の壁の幅は20cm程度、各部屋の床は壁の上端から40cm程度の深さまで掘り下げられている。残存状況は概して良好であるが、やはり原位置の遺物などはない。

ピット及び出入口　ピットは東西170cm、南北155cmのほぼ正方形で、床の標高（約877・64m）は墓Aのピットの床（L1006）とほとんど同一である。北西部分の岩盤は階段状に二段掘り残されており（L1013）、北西壁天井部分に設けられた出入り口を通して地上とつながっている。この出入り口はおそらくその上を走る道路によって塞がれているが、崩落の危険性を考えて土砂の除去を行わなかったために、詳細はあきらかでない。また、床の南西部分には直径30cm程度の窪みがあり（L1011）、そこから幼児のものと思われる人骨片が採集された。

アルコソリウム4　東側の小部屋（部屋4、L1004）は長辺180cm、短辺70cmの南北に長い矩形の部屋である。

アルコソリウム5　南側の小部屋（部屋5、L1005）は長辺155cm、短辺80cmである。部屋5からは、人骨片や土器片だけでなく、指輪と思われる青銅製品の一部も採集された。

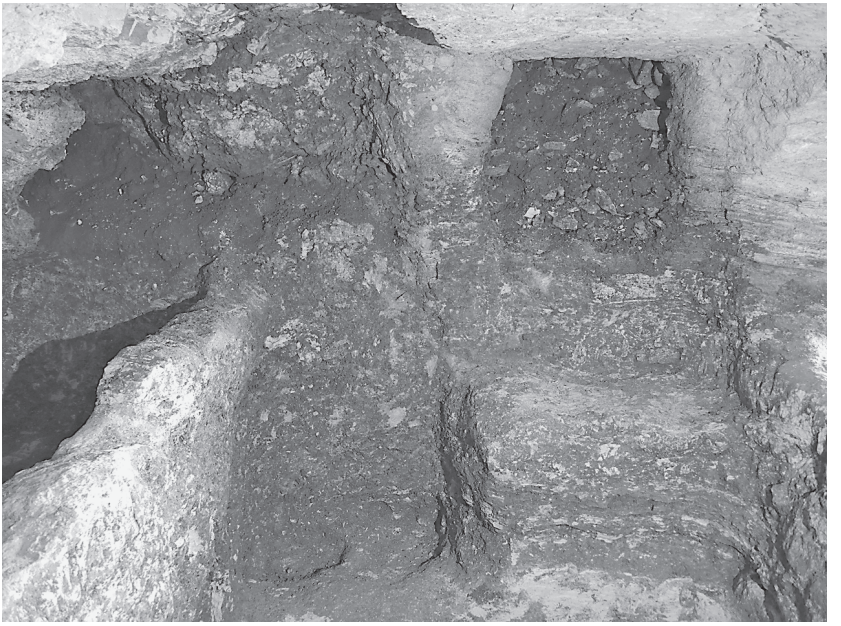

図7b　墓Bの入口部分（内（東）側から撮影）

アルコソリウム6　北側に位置する部屋6は東西に長い部屋であるが、東辺に比べて西辺が短く、いびつな形状をしている。床もほかの埋葬室のように掘り込まれておらず、中央床から見ると棚状に残されている。これらのことから、墓Bの製作者が部屋6を掘削中に、隣接する墓Aにあたってしまい、作業を中断してしまった可能性が考えられるであろう。調査中には部屋6を認識するのが遅れたため、中央の床と同一のローカスとして遺物が採集されている可能性があるが、未完成の埋葬室であれば使用されていなかったかもしれない。

（3）まとめ

今回記録作業を行った二基の墓はいずれも、墓の形態や遺物からビザンツ期のものと推定される。また、この付近には、ほかにも未確認の墓が分布している可能性がある。これまでワディ・タワヒーンの調査では鉄器時代からヘレニズム期の墓が知られていたが、それ以降も継続してビザンツ期まで墓が造られたことが確認された。

横穴墓自体はワディの東岸でも確認されていたが、

墓Aのように北向きの墓は珍しい。ブルジュ・ベイティン遺跡と近く、正対していることから、ビザンツ期の教会堂と何らかの関係があった可能性も考えられる。しかし、この墓はあきらかにビザンツ期の墓であり、伝承の預言者の墓とみなされていた可能性は低いであろう[15]。

Ⅴ　大型貯水池に付属する地下施設の調査

地下施設はブルジュ・ベイティン遺跡ではなく、村の中央の大型貯水池の南に存在している。これは長辺約5・2m、短辺約3・2mを測り、貯水池の東壁と接する建物であるが、壁は直交しておらずに平行四辺形を呈している。天井はアーチ状である。西壁北部には貯水池からの取水口と思われるものが認められる。また、東壁北部にはアクアダクト（地下水路）の取水口があり、同南部には現地表から入る石組の階段が付属している。北壁と南壁には、縦40㎝、横20㎝ほどの矩形の壁龕がそれぞれ2箇所設けられているが、正対しない。

このような壁龕を持つ施設の類例[16]を見ると、石臼を支えるための施設であった可能性が考えられる。もしこれが貯水池からの水流によって石臼を回す水車小屋であったとすると、ワディ・タワヒーン（『石臼の谷』の意）の語源と関係していた可能性も考えられ[17]、十字軍期～マムルーク朝期の農業集落の構造を知る上で重要な意味を持つと思われた。

今回の調査は、南北壁の壁龕が水車の軸受けであった可能性も考慮に入れ、施設中央付近に幅1mの南北方向のトレンチ（トレンチA）を設定して発掘調査を行った（図8a）。また、本施設と地下水路との接続部分の状態を確認するために、施設東部にトレンチBを設定した。

（1）トレンチA

トレンチAは、北壁東側の壁龕と南壁西側の壁龕の直下を結ぶように設けられた。結果的に、西壁から約180㎝東方の位置に、同壁とほぼ平行をなすものとなった。これらの壁龕が水車の軸受けであったとすると、この直下には水車や石臼に関連する遺物・遺構が出土することが期待されたからである。

堆積土　施設内の堆積土は階段から流入したと思われ、全体的に南から北へ傾斜していた。表土（L701）は粘性の低い黒色土で、現代の廃棄物を大量に含んでいた。この堆積が最大で10㎝ほど続いたのち、表土直下の粘土層（L702）が確認された。この粘土層は水分を多く含み、

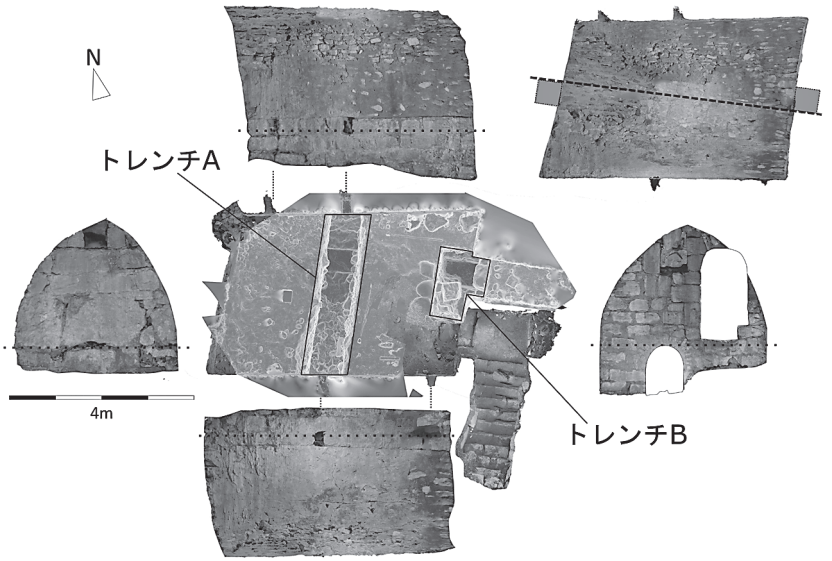

図 8a　地下施設の構造と調査区　（図作成：渡部展也）

粘性の非常に強いものであり、こぶし大の礫を多く含んでいた。同様の層は岩盤直上まで約90cmにわたって堆積していた。また、この土層から出土するのはビザンツ期の土器片がほとんどであり、いずれも水流による磨耗が見られることから、本施設内で利用・廃棄されたものではなく、外部から流入したものと思われる。

岩盤の加工面　施設内の現地表下約50cm（レベル：851・049m）の地点において、施設北壁の基底部に達した。基底部は岩盤を加工したもので、後述する水路に向かって60cmほど傾斜していた。この岩盤加工面直上の土層（L703）は、表土直下（L702）の土質と変わらないが、わずかに十字軍～マムルーク期のHMGPW土器を含んでいることは注目に値する。

水路　この土層を完掘した結果、岩盤およびそれに付属すると思われる施設の存在があきらかとなった。トレンチ北部には幅約50cm、深さ約15cmの溝（L707）が東西方向に設けられ、西部の取水口、東部の地下水路とほぼ同一直線上にあるように見えることから、水路の一部と考えられる。また、この水路内の堆積土（L704）には、大きさ2～3mmほどの巻貝や二枚貝が大量に含まれていた。周辺の同一標高の土層からはこういった貝類はほと

んど検出されていないため、この水路が機能していた時期か、その直後のものであると考えられる。(18)

礫層　水路以南からは、岩盤上に最大で約30㎝堆積した礫層（L706）が出土した。この礫層が水路と関連した人為的な構造物であるのか、自然に堆積したものであるのかを特定することはできなかった。また、当初期待した水車や石臼と関連した設備の検出もできなかった。

（2）トレンチB

トレンチBは、トレンチAにて出土した水路とアクアダクトとの接続や、礫層の性格を判断するために設けられた。また、トレンチAの調査によって、かつての使用面が現在の地表よりも約110㎝低い位置に存在することが明らかとなったが、踊り場からそこまで到達する階段等は知られていないため、本トレンチの調査によってその痕跡が確認されることも期待された。調査区は地下水路取水口の北辺付近より東西70㎝、南北150㎝、さらに地下水路内部の東西30㎝を覆う範囲に設定された。

堆積層　トレンチBは、土砂が流入する階段と流出する地下水路に跨っているため、発掘前の土砂堆積は、トレンチ南部から北部へ向かって50㎝ほど大きく傾斜している状態であった。表土（L705）はトレンチA同様に現代の廃棄物を含んだ黒色土で、調査区全体を同一標高にならした段階で、粘性の強い表土直下の土層（L708）の堆積が確認された。本土層も磨耗したビザンツ期の土器片を多量に含んでいる一方、岩盤の直上まで現代の廃棄物が混入していたため、トレンチBにおいては岩盤直上のローカスは設けていない。また、本調査区からは貝類を含んだ土層は検出されなかった。これらのことから、地下水路の取水口周辺は、比較的最近に撹乱を受けていると思われる。(19)

水路　トレンチAで検出されたものと同じく、岩盤には50㎝幅の水路（L709）が掘り込まれており、地下水路へと続いていた。しかし、両トレンチで出土した水路の位置を比較したところ、両者は厳密に同一直線状には位置していなかった。つまり、水路は直線的に設けられていないことがあきらかとなった。また、これらの水路はほぼ同一標高に位置しており（L704：850・756m、L708：850・746m）、これだけでは水車などの設備を動かすに十分な水流を確保できなかったと思われる。ただし、西壁北部の取水口が床よりも高い位置にあったとすると、落差を利用して動力を得ていた可能性は考えられる。(20)一方、

図 8b　地下施設の東壁とアクアダクト（トレンチ B）（西側から撮影）

トレンチAで出土したような礫層は、本調査区では確認できなかった。

プラスター層　岩盤とアクアダクトの設けられている東壁との間には、厚さ5㎝程度のプラスターの層があることがあきらかとなった（図8b）。すなわち、岩盤にプラスターが塗布された上に切り石の壁を積んだことになり、これらが同時期の建造だと考えると不自然な構造となる。地下施設全体が歪んだ形状をしていることと合わせて考えると、これらの水利施設の基礎部と上部構造には時期差が存在する可能性が高まったといえる。

東壁の石材　施設東壁には、現地表下で整形方法の異なる石材が使用されていた。この石材は岩盤の上に位置しており、施設東壁の最下段を形成する建材の一つである。アクアダクトなどにはほぼ平坦に加工された石材が用いられているのに対し、この石材はかなり粗く加工されていた。調査区の縁に近接しているために、この石材の詳細は明らかでないが、アクアダクトの壁との間に空隙があることから、両者は本来は一連の構造ではなかったと考えられる。石材上端の標高が、トレンチAで検出された北壁と南壁最下段上端の標高と近似であることも、偶然ではないであろう。この北壁と南壁の最下段も、粗

く整形されている。さらに、この石材の北端は階段から到達する施設出入口の北端と同位置にあり、何らかの関連性が考えられる[21]。

充填された石材　アクアダクトの取水口付近には、長さ約2mにわたって、水路直上から約90cmの高さにまで石が込められていることがわかった。比較的大きな石がほとんど隙間なく、ほぼ垂直に積まれていることから、これは人為的な造作であると考えられる。上述のアクアダクト直上の廃棄物は、この際のものである可能性もある。また、これらの石の一つは直径が約80cmで中央部分に直径約12cmの円形の穴が穿たれていた。元来は、石臼の上石など人工物の一部であったようである。もちろんこれは原位置ではないが、本施設の性格を考える上で参考となるかもしれない。

（3）まとめ

今回調査を行った二箇所のトレンチからは、いずれも岩盤上に掘り込まれた幅50cmの水路が検出された。これらはおそらく一連の水路であり、西方の貯水池から東方の地下水路へと連続する水利施設の一部であろう。トレンチAの水路以南からは岩盤上に積まれた（または堆積した）礫層が確認されたが、その性格はなお詳らかでない。

一方、本施設の平面形が歪んだ形状を呈していること、プラスターを塗布した岩盤の上に壁の石材が積まれていること、施設を形成する壁の最下段の石材とそれ以外とで加工法に違いがあることなどから、本施設には複数の建造時期が存在すると考えられる。元来は上屋のない構造の上に、後代に上部構造が付加されたのかもしれない。その場合、土層から出土した土器や上部構造の性格から、最初の段階はビザンツ期、第二段階が十字軍期～マムルーク朝期の可能性が高いであろう。ただし、出土土器の数は限定的であり[22]、本施設の全体構造もまだ不明なため、これは暫定的な推論の域をでない。これらの課題は残っているものの、調査期間の都合上、この段階で調査を中止した。

参考文献

Albright, W. F. and Kelso J. L. 1968 *The Excavation of Bethel (1934-1960)* (The Annual of the American Schools of Oriental Research Vol. 39), Cambridge, American Schools of Oriental Research.

Conder, C. R. and Kitchener, H. H. 1882 *The Surveys of*

Western Palestine: Memoirs of the Topography, Orography, Hydrography, and Archaeology, vol. 2, Sheets VII–XVI, London: Palestine Exploration Fund.

Dalman, G. 1925 “Die Nordstrasse Jerusalems,” *Palästina Jahrbuch* 21, 58–89.

Freeman-Grenville, G. S. P. 2003 *The Onomasticon by Eusebius of Caesarea, Palestine in the Fourth Century A.D.*, Carta.

Finkelstein, I., Bunimovitz, S., and Lederman, Z. eds. 1997 *Highlands of Many Cultures. The Southern Samaria Survey. The Sites,* Tel Aviv.

K. Koenen, 2003 *Bethel. Geschichte, Kult und Thologie,* (OBO 192) Freiburg, Switerland and Göttingen.

Magen, I. and Kagan, E. D. 2012 *Christians and Christianity vol. 2: Corpus of Christian Sites in Judea* (JSP 14), Jerusalem: Israel Antiquities Authority.

Millwright, M. 2010 *An Introduction to Islamic Archaeology*, Edinburgh: Edinburgh University Press.

Ovadiah, A. and de Silva, C. G. 1981 “Supplementum to the Corpus of the Byzantine Churches in the Holy Land, Part I: Newly Discovered Churches,” *Levant* 13, 200–261.

Schneider, A. M. 1934 “Bethel und seine altchristlicen Heiligtümer,” *Zeitschrift des Deutschen Palästina-Vereins* 57, 186–190.

Sellin, E. 1900 “Mitteilungen von meiner Palästinareise 1899,” *Mitteilungen und Nachrichten des deutschen Palästina-Vereins* 6, 1–9.

Sternberg, G. 1915 “Studien aus dem Deutschen evang. Institut für Altertumswissenschaft in Jerusalem: 27. Bethel,” *Zeitschrift des Deutschen Palästina-Vereins* 38, 1–40.

Wilkinson, J. 1971 *Egeria's Travel*, Oxbow Books.

杉本智俊 二〇一四年 「ベイティン（ベテル）遺跡における考古学的調査の課題」『聖書学論集』四六号、六一―八二頁。

杉本智俊 二〇一六年a 「二〇一五年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』八六巻三号：七三―八五頁。

杉本智俊 二〇一六年b 「パレスチナ自治区アルジュ・ベイティン遺跡の塔の機能と年代―ビザンツ期、十字軍期の塔との比較を通して」『古代オリエント研究の地平―小川英雄先生傘寿記念論文集』リトン、二〇七―二二九頁。

杉本智俊・間舎裕生 二〇一三年 「二〇一二年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的一般調査」『史学』第八二巻第一・二号、一〇五―一二七頁。

杉本智俊・菊池美 二〇一四年 「二〇一三年度 ワディ・ワタヒーン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』第八三巻第一・二号、一一九―一三八頁。

杉本智俊、菊池美、稲野裕介、間舎裕生 二〇一七年 「二〇一六年度 ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』第八七巻第一・二号、一六五―一九六頁。

杉本智俊・菊池実、間舎裕生　二〇一五年「二〇一四年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』第八四巻第一―四号、五二三―五三六頁。
杉本智俊、菊池実、渡部展也、稲野裕介、間舎裕生　二〇一八年「二〇一七年度　ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』第八七巻第四号、七三―一一一頁。
杉本智俊・西山伸一・間舎裕生　二〇一三年「二〇一三年度ブルジュ・ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』第八三巻第一号、五七―八七頁。

註

（1）本調査は、同自治政府観光遺跡庁（長官　ジハド・ヤシン氏）との共同調査である。

（2）基盤研究A、課題番号 24251015。

（3）中央遺構は二〇一六年度に検出し、精査したL字型の囲みで構成された正方形の遺構のことである。詳細や位置については、杉本 二〇一六年a、特に図7を参照されたい。

（4）巡礼のエゲリアについては Wilkinson, 100, ボルドーの巡礼については Wilkinson, 27 を参照のこと。ただし、ボルドーの巡礼は石や墓についての言及だけで教会については記していない。ヒエロニムスによるエウスビウスのオノマスティコン（*Onamasticon*）の注解（Freeman-Grenville, 13）も、エゲリアと同様、これらの出来事を記念する教会堂について言及している。

（5）コンダーとキッチナー（Conder and Kitchener 1882, 307）、ゼリン（Sellin 1990）、ダルマン（Dalman 1925）：スターンバーグ（Sternberg 1915, 21）は伝承の教会堂をブルジュ・ベイティンと同定しており、オヴァディアとデ・シルヴァ（Ovadiah and de Silva 1981, 208）はブルジュ・ベイティン遺跡にアブラハムを記念する教会堂、フィンケルシュタインら（Finkelstein, Bunimovitz, and Lederman 1997, 552）はキリスト教関連の建造物があったとしている。一方、ヒルベト・マカーティルと同定する研究者には、シュナイダー（Schneider 1934, 187）、ケルゾー（Kelso 1968, 53, § 214）、ケーネン（Koenen 2003, 21–22）がいる。

（6）エルサレム周辺地域において、「十字軍期」は第一次十字軍到来の一〇九五年からサラディンによるエルサレム陥落までの一一八七年とされる。

（7）教会堂のアプス部あるいは丸いシボリウムの地下に墓を造ることは、パレスチナ地域におけるビザンツ期の教会堂でもかなり広く行われていた。例えば、ベト・ジャラ（Beit Jala）の教会堂（Magen and Kagan, 86–87）などを参照のこと。

（8）最上層は二〇一六年度出土資料（L467、PLD-35023）で、1σ: 1183–1217 cal AD（68.2%）; 2σ: 1159–1225 cal AD（94.9%）、第二層は本年度の資料（PLD-36972）で、1σ: 1170–1175 cal AD（10.9%）, 1183–1210 cal AD（57.3%）; 2σ: 1163–1218 cal AD（94.9%）、第三層も本年

度の資料（PLD-36973）で、1σ: 1170–1175 cal AD（10.9%）, 1183–1210 cal AD（57.3%）; 2σ: 1161–1219 cal AD（94.9%）である。尚、床の石の間からの資料（PLD-36974）は、十一世紀後半から十三世紀始めまでの幅広い年代（1σ: 1058–1075 cal AD（14.8%）, 1154–1189 cal AD（53.4%）; 2σ: 1050–1083 cal AD（23.6%）, 1151–1212 cal AD（69.3%））となっている。

（9）石が黒光りしている点については、元来の組成によるものかもしれないが、後に人々が触ったり油を塗ったりしたことによる可能性も考えられる。

（10）教会堂内陣部分の敷石よりも、小ぶりである。

（11）W826は、東西方向の壁W824と直交しプラスターが連続している。

（12）資料（PLD-36975）の暦年代範囲は以下の通り。1σ: 1326–1344 cal AD（37.9%）; 1394–1408 cal AD（30.3%）。2σ: 1317–1353 cal AD（54.9%）; 1389–1414 cal AD（40.5%）。

（13）資料（L861、PLD-36977）の暦年代範囲は以下の通り。1σ: 1050–1083 cal AD（39.0%）; 1127–1135 cal AD（6.0%）; 1151–1169 cal AD（23.2%）。2σ: 1045–1095 cal AD（44.5%）; 1119–1208 cal AD（50.9%）。

（14）この地区の作業期間は、二〇一八年八月一八日と一九日であった。作業者は杉本智俊、渡部展也、間舎裕生、有吉亮、長尾琢磨、逢坂暖、スフィヤン・ダイスであり、現地作業員の補助を受けた。

（15）預言者の墓はまだ発見されていないが、ビザンツ教会堂内の他の場所を調査すべきであろう。例えば、塔の下（アプスの脇）や中央遺構北側翼廊などが候補地として考えられる。

（16）例えば、ヨルダン・ハシミテ王国のグール・アッサフィ（Ghur al-Safi）のタワヒーン・アッスッカル（Tawahin al-Sukkar、十三世紀、Millwright 2010, Fig. 46）やイスラエル国ハイファ近郊のアフェクの施設を参照。イスラエル国アクア・ベラ遺跡（十字軍期）、エジプトのリビア砂漠ダハラ・オアシスのオールド・ミル（十二世紀）、隠者聖パウロ（St. John the Anchorite）修道院、ロゼッタ、アマスヤリ（Amasyali）の家のアブー・シャヒン石臼（九世紀）などは、水流によるものではないが、やはり石臼を回す施設で同様の構造となっている。パレスチナ自治区では、ベイティン村の北西約4・8㎞にあるジフナ村のビザンツ期～十字軍期の要塞の地下にも同様の石臼を確認することができる。

（17）但し、タワヒーンは複数形である。

（18）この貝の生態（好光性／嫌光性・流水棲／止水棲）を分析すれば、本施設の性格を特定することに寄与しうるかもしれない。

（19）但し、村の住人によると、岩盤が露出した状態は見たことがないとのことであった。

（20）上述アフェクの施設などはそのような構造となっている。

（21）階段の踊り場部分が石組によって構成されているわけではなく、土が込められている点も興味深い。

(22) 出土した土器は水流による磨耗を受けており、外部から流入したものである可能性が高い。一方、それらの大部分がビザンツ期のものであったことから、貯水池周辺部には十字軍期～マムルーク朝期の居住はほとんどなかったのかもしれない。